

冊數	番號	部門
三	一四	三

約江輿地志畧

三

近江書志卷之六

贈所 寒川辰清轉

志賀郡

一 柿落郡を東琵琶湖の半と限り、巽を栗牛郡と文で、南を山岸
國二尾谷、北は坂筋の山並の仲を山岸の國界、牛庵山相接の裏
山に亘る、主とす大治處庄原の領と附り、乾が山岸領折半山
達所と名づけられ、いも三尾郡界、細川麻績山より長と屈曲さ
ず砂利打下接り、村数七十九あり、蓋志賀の文字落書き、篆刻も
不専用なり。日本地主賃作作り、住日を代て主の文字と申す
落書き又ゆく後世のままであり、今日を代て姓と古たはより
行き部す、志賀某と云ふあり、國郡名と申す所、梅子也。

せ後より一人宣中天皇行天皇御事と大和國後日代の事より
都とあると笑ひて名ふ。應ノ年成孝天皇仲哀天皇後
この地を都とす。本日まで。河口古モヨリ奥國又稱モヨリ
同名にて。修全と和泉と。や泉劫り。而國主の御名也。一
先主の御名も此は。主君の御名也。歟

一大津

志賀部の奥區より日を度色三十六のうち一月と近江二陵の若
一や大津ハ當とある 桜井地を大津と名づけ。其を幸光に被れ。始
相津の吉事記の某神記曰故此古今名隨先命而行。志國今
自東方所。遠俗河別與其文大此古事。往遇相津故其地謂相津や
伊勢延佳神主云相津を以て江もまた號却。今の大津の事と化。は三十
一代源ノ天智天皇の六年又和國をもさす。此地が都と遷し。志賀
奈津率セ。今村小太は相津刻合を以て。是後天武
天皇大友主申乱。大津の御事。是古御也。自。古津
ト。ソ。ル。ア。リ。 古都とコット門も古 徒日寺。北野天皇。天平十二年二月
亥亥到志賀郡木津頃。諸々木津コット調ス 事役大津改。事
極。是天皇の御事。日紀署。延喜十三年十一月丁丑詔曰。近江國治
郡古津。是帝旧都。今移事下可也。首號改称。大津。と。極。或。帝
及岐城帝。本地。行。革。可。之。可。日。東。化。日。延。曆。二十。年。二。月。辛。近
江。大。津。主。司。奏。歌。併。近。行。宮。諸。寺。施。錦。敷。裏。國。更。日。大。同。二。年。十
月。乙。亥。行。幸。近。江。國。大。津。統。領。以。歸。大。嘗。也。是。多。と。歎。く。そ。う。付。多
回。都。乃。跡。行。玄。賴。主。と。連。セ。ア。ウ。 行。玄。賴。主。ア。ウ。付。多。

大友皇子 天智の孫と云ひ大津を天武の御子也言の
清を作り奉れ也權雲之地と之ゆハ大津のまなりと林亭と大
皇子の文集と特と表焉と載りて滿之地と云ふありんや
京都より江戸と稱し土十三次郎の主城也 ほりの陰とほりし
の大化二年とがんもあくらのはよけにすすみほりの
ユキシテ御身まゝ、度々奉事 神社一院の所す 来ゆる中右佐藤
彦と經歷りつよの皆け跡すとまづりかく あうのわへんに隆
たゞひよの御跡すと平安世の國め権雲は地このはく三里
小越及尾桑山城すと主城西園へん清風は難也船も空く御家
敷室へり 敦實より馬とあれ山七里の山城と御家小国津
ヨリ又船と牛と駆上二十里と愈々あ津と名也と大津の名も
とこそ町敷丸奉と所 小太主元ス 別と名す えと大所アリ 高所也 オ叶也
京町也れ東極とまき町也と云大津役とおまむの界や 中町魚
松村平野神社の前よりもる倭町也、松平村石の一町洋面も
ももく或ハ云大津と云ふハまき町と石の中路と川も
そと疆界と云ふをまき町アリと有れと云ひ御印也すと力も
あ死も云ふ 京町敷大津の町と云ふある邊方町より少しひの有と
限り西と三井寺社神也松原界に玉門と辰を北半もえり
玉門玉支高原と載りうる古昔の大津と云ふ今れ大津也り、這
玉門玉支高原と載りうる古昔の大津と云ふ今れ大津也り、這
玉門玉支高原と載りうる古昔の大津と云ふ今れ大津也り、這
玉門玉支高原と載りうる古昔の大津と云ふ今れ大津也り、這
玉門玉支高原と載りうる古昔の大津と云ふ今れ大津也り、這

度も年十星すとくとくの事あ切けりとて國を治め候て後

神社

ちかまの御事もひれども其に事候を控へむ事あり。神社を今御、ナリ及美術の祭事

まことに仰代をとくとく少々の事もします。今お清め

勤じまことれく後而至る古郡文をやると死ぬを後を

立すはも高車より高級の文化もあつて高町より文化より大津波の

公役船馬石五足 船百艘 売支千八百頭馬信岡を引く人馬の向う引けり花元よ

高車より中より大津馬風花もしく花屋のひよと運び一事

乗りけり新之祐が家の跡く

國紗くそねく海う大津馬とく一げん色ゑくからとゆと大
情の里を清く令うは

史末集

水の白も身をいとひに筆すふと身の墨の

拾玉集

ウトス清の里の夕鶴のうきよくひきよ

林濯ふ子

九陌大津隈をくわづ來一亨那馬裏才里遠物岡村
上任公酒船行津輪盡酒度相及水罵唱掃塵埃

羅山文集

山崎園序詩

車馬利産塵志未是夜額鑑湖先照眼不同早船津

葉加音全集

大津町小名

南近分町

北進分町

葉加音全集

ト火町

上野町
町の上に立す松の
社ありの事

古文真賞

以一百五十一今一百四十九

今一言傳へし事は、御身に於て、一言かくおもひて、榮を本と極く下大谷町
市人古事記を書きしれん。ハシナリ。

中大谷町 上大谷町
あほのまちに御連の毛皮古と多く賣れる高ひれ人
などり上の毛皮は毛が多めで毛皮の人に

上所町 下所町 行くのうえ

下前或南也之事也。前町之世

大體、時と云ふは必ず候金十石程入る事
西そり程度止まつてゐる事到處を
れす 下句の如極意する所の事より人情而情多め

西山町 李金所町 金藏町 蔡格町 錦合町

蘇東坡詩集卷之二

吉保町
北保町
保之助
金之助
前妻即義保の孫下之丸
今大助
多助
保之助名義也
前保同上
飫焉亭町

大門町 気三井寺の前
かくら町
庶園町 三井之雪傍八三井寺前車乃屋
太津久江本多東口三井

桶屋町
中宿町
劫八尋役
中宿町

行幸町 八幡町 池波町 大町

新町
戎町
塙町
桜町

上博高町
九五
九五
九五
九五

金匱所 上而名所 下而名所 素所

四喜神社
西之口
西之口

石原町
上高町
中高町
上少原町

下當町
浮石町
吉原町
雁乃尾町

輶金町
塙町
大島町
高見町

持叶
而落
之於
中叶
葉落

西川町

喜屋町

丸原町

玉置町

高瀬町

絶間町

弓削町

伊瀬町

川口町

牛宿町

高野町

今鹿町

松葉町

赤坂町

南保町

猪口町

平藏町

小舟町

高田町

寺内

新町

鳴尾町

糠豆子

紀多子

安田子

志置町

高金園

山下の園

吉田子

猪之進町

八幡園

風呂園

吉田園

毛原町

鷹巣

正陽苑

大粒子

鳩巣

本觀

正陽苑

喜多

もあとくらべてねのつゝ可改のうもよづきや高木う

こづき様まゆうすう

一進合 制作れり 京 うり よひ此の町ともすす制れを
たゞくよし ひそくやくあひゆく制れをたすくわ土佐れ
作く此の肩方す あは年中多御佛 あは年も多其
の僧道 あはは地佛の像を作ふ年をハシナ御院送れ
まえすけ あは地佛像とある事と本と想業 は地と送れ
佛を文 まえとまんむや 一作名ニ二瓶 が形 金瓶も多
一施主 あはの傳員も一施主 あは承員も至る事多
あはしきせと有り すと之に おもととおもとと有りの続

雍州府志よりもじる所用として寺谷之地元に於ては
常もまし事も即ちも五字御歌の文と佛像二龕と有り
追うるの謂に有り佛像の二龕と称する事理よりと
有りて是れを核むる事無く之をうる
一割れたり西面御靈廟に即ち山城國山神の餘割れ所と
無ふ事有りともあら作のあれ山城山神也山城大角鷦
老翁を以ての内と也有り或ハ前町と云也此を山城と
山神氣ありゆゑを御ひきもと也に大津氏もと山城と
近は界と有るも界へお坂の周とよんと執事代移向寛
平七年十二月三日官府の役山城との内事を會同國主に
者や々と詔書を有すと事へ因りそも立候て之を
一峠坂を古のほど山城近江の國界の上原日吉大寺地をく
平家の將をも極持しよりシヅメの名をも居たクノは、邊を
タケイ也とゆのをりアヒ邊に有りて仰て其と伴ひて之と
一様下り仰てニ仰洋りうち大佛倒立の如きと
乞邊は山城村家の傍まで山城山神事と會事や一村
村の本のりもうちの傍邊に有りて其な神の社殿破損
とかくもともい日を行焉て正教経説の佛しろと
とくより其の事す

一國鬼の神社 在わの此町多神立神、信五帝也高
橋坂をりと云多紀毎年六月也。而越方町より祝祭する

西より進方町に園田の社主と
ひゆの手の印ありまへせん

一 横堀川 因新屋を津ちふ京都見廻のまゝ一尾のまき

一 喜福寺 因新屋一室を東御本寺のまき

一 関田川 下大寺町上大寺町の中流を走り或室屋上古のまゝの
川とも云ふ河神也はと傳て園田と云ふ古傳と大野町を
いづ事も此のあれられしに大野町横既の村すを有する

一 横堀園田川を走り向ぬ事も有る事と不知

一 伊勢を守るや一里塚町より北山中由来年九月

十日 が一書の回る

一 光景寺を一里町より沙越山と号す事博傳を祀るのまちと
一大寺の上中であり其を源寺町もあくとあるがて二間の谷す

一 木や塙の町大寺町え一里塚町山中町の山人寺堂と號して
さうのまちにえすも下河内郡の経と號ともいふと大石
経成が本傳修造を後には世稱すをより

一 走升下の大寺町もあり石とだんと一小のやしも水を満た
事より今ハ多店庵と稱す旅人憩息の宿とし且度をうる
事よりめくほすくわくとれおとくとゆいばあす
涌出水の勢至昇のあひ空に挂かゆる拂多所を昇むお役
をうりとがと書くとい舟のす

隕田す津圭井水之清有者度者告者去而猶可聞

拾遺集

立升れやとひかくもやみの園りつゆタ敷めぬ

後抜き集

おほひ園りそよごとを拂のうとはえと止むれ

鶴子主ア詩

急々涌升邊寺精芝院勢活有餘清尋難に食

泉水一歎自知爽客情

一簾原葉障堂 壱丹葉店の邊ヨリ其障の石像山陰大師の心

一綠井手 因町を 一向宗

一塵乞寺因のまゝ降土室退ひ松ね代の本草と

一西も寺中比大寺御玉すり行臺山寺すに淨土宗西山院ニ奉尊
ゆ此院佛ノ座像長、七八尺の仰と申すとある御坐、六萬葉下院
香保、石佛各行臺の仰と行臺の木像、行臺周邊を也
一寺傳云男女の清氣と行まふ、少効驗、又太平勝主年中、行臺
蓋簷の圓臺がりとも又云此地山岸近江而その際とあらず、
ともば古大伽藍、これも今より跡すら見えぬ、既に北山の北の
割れ角、九所なり天平始、其の後も國の累々有事
數々、代替て守り天平年中行臺、今すく日本、すくも
寺と連りて事と云前後、往古のものを、今から遙かめへき
身やかく多郡少々の村の傍、園うち村と云ぢるゝもの四頃

既往とん、一國アテのふちも物られず、天平十二年ノ清季

之國からんと建テ事はあらすじ手の回顧もすまとの歴史
やつともあらず放てたるも如鏡うれいを尼寺に移りて
し國より持持手の本宮モ天王モうへ聲すく極津河因
界より大坂天海ハ良きあり多分母もあらずもあらず
因縁ありそもほも傍もも尼寺とするも後院と云ひ
公孫より並川寺ヤマト土佐田代地主と編し臣者寺と合し
持持手もまの幸ヒ浦ヒ是之名祥

一西方寺 因町三河峰吉山西山脈中す以御范佛の立像而跡
ノ作くは也せと古傳有もの事とばくはくの院下二作の角一作
京セ隆寺所脇今山蓮光寺と主な尼寺の事と傳名跡志
寺ももとよりは從東寺よりし一件あるすがよと題作の
二件とも不可なりとす奇蹟とぞんと却ち先とぞん
一坪丸社 上の久安町より是野小町の坪丸と號すとぞん
多れ每脊から上中下の久安町の名也

一相坂毛太子の坂毛毛少をほりは古北國也と云ひ承もは
うめと萬くとも云々坂毛坂お坂は坂文字多見ん御坂毛と近習と
之車を日葉記神功皇后記曰武内宿禰令三軍憲令推詔國以
是令曰各備強敵千髮中且佩木刀而率百名之卒誘恐熊王
曰吾勿貪天下唯壞幼主從君王者也豈有距戰耶願共絕強搭
兵與連和焉然則君王盡天業乎序高枕專制万機則頃令
軍中恚絶強解刀投河水悲然王信其謗言憲令軍衆解矣
投水而斬強寔武内宿禰令三軍出備強更強以佩真刀度何

進文忍然王知被欺曳兵稍退武臣高祿出精兵而進之逼于坂
坂以破故号其所曰逢坂也。うし康富記曰：宝德二年五月二日今夜
四角四塙祭被行之皇居。四角塙外四塙會坂大技訖草山崎。うく
往ちる。六月晦日、道邊食祭とて京阪四角の路とく鬼魅の化方ち
まもと京博々入てんなり。乃と佐わと佐と祭と祭と祭と祭と祭と
比叡とは四方四塙の祭とも也。祥々能詩辭賦と云ひりし中古
絶えく。又してとくと古事根元とも古事と裁を追すと絶え
仰ぎやといひて中絶ノ。とき事うそし神中抄及奥傳抄と世の
方釋しまく四塙祭とて詔とて詔とて詔とて詔とて詔とて詔
一すりお坂よじゆす事とぞ。詔とて詔とて詔とて詔とて詔とて詔
て詔とて詔とて詔とて詔とて詔とて詔とて詔とて詔とて詔とて詔
迄とて詔とて詔とて詔とて詔とて詔とて詔とて詔とて詔とて詔

進て是地主知被殺され兵相連我は馬鹿主婦上に娘を
嫁に送り其の夫所曰連地也より康有記の事也

此處の連地は連屋と云ふ事也連屋の事也連屋の事也
連屋の事也連屋の事也連屋の事也連屋の事也連屋の事也

一阿薩尼堂念佛寺 相撲する者信証敵と云寺傍事と族人と云
く正と故を知れとなんかへやう津まよ西高き事有むる

カ経院の子原地名乃立像あり土居あらひは浮く圓字とある
うるゝゆゑもあらむ博聞少く之浮く役職工事河里
寺と号一差少く而研れと據筆文甚多く載られより圓字と
近ねちの事多の事居て之地と今お年々少きわざる事の像

とすよす草山町たまの庭里の邊に御廻しきりしと

國手市本と勝郎山町と之の徳重名流の道ちゆが事の

志賀郡第二

近江奥地志畧卷之七

とおはなを浮してかくしおすがまの祀祠の事なり。右に
精良に小町事元と申し寺を山中ちの原中納主殿より子
をうやま三え内歴の元と小町と出ゆる御山南隣り山の出羽山
陽北は山中村少く生す子の寄色と云ふ事とまう淳和仁明文
徳の所代と官仕ゆ色の塗り身をゆう一參焉。あはの
處と佐和ノ後生の舊四里とゆく死やり湯の湯北と世基

一元と山中村の事と實り寺を良寛大もあははし上院のとき
近江と西遠の庄と申す佐々木姓とてくべ小町とそんと王造
の所と今の山中村の邊す法備等とまゆく曰山望少所如社
妻形竹と申す五造う小町をあははみ許の名れども或と山中
村後は山の邊すと申す象家の祀祠とたもの也と山中町
と總りかくえとけ続有ひつゝ小町を山望少所如社と
と事玉造少守とと申すと申すと申すと申すと申すと
と人びり大馬鹿を考らまし小町と山望少所如社と良寛
と申す又駄無をかての後之事せうと申すと申すと申すと
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと
と申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと
と申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと
文多ともあらてと文字とも本ヤアサシモアリアハ後既多乃

室一つの墓門)あすはは尼傳(まうりそ)山をかかへ墓す
と爲よもちきをめうそもまえは江戸高人化ゆるをと
字とく墓(山町)の山地をと山地をとるを送る
達坂園 枝屋敷の園を立て、方庭天皇の大化二年(日光院)
花の園を立て、極度天皇の御子(御子)をう天皇故
と平ら敷きそらは地と園門(門)を立て、山をとるを
とてありぬ、山とて流しよさんを元田の山(山)を百セヘ
十年(大和)より始むるをゆきやうとく日たけり。の後
いきとくと女車(女車)とうめせりやうとく日たけり。の後
くほとと車(車)とよめせりやうとく日たけり。の後
走(走)あとされ、園(園)とよめせりやうとく日たけり。
とくほとと車(車)とよめせりやうとく日たけり。の後
花(花)と竹(竹)のわらの園(園)を取(取)て、御(御)のぐるすとくと
えりり寄(寄)り来(來)り、實(實)事(事)と
ともに使(使)まつてあれ、不(不)可(可)し縛(縛)くちきの北(北)
がれ遊(遊)まつて、門(門)は記(記)御(御)源(源)の北(北)の園(園)を邊(邊)の北(北)
色(色)の園(園)を立(立)て、上(上)中(中)下(下)の園(園)を付(付)古(古)園(園)の境内
とひだりまほく(ほく)の園(園)を背(背)て、東(東)園(園)を構(構)まつて、
匂(匂)ふ少(少)少(少)は園(園)のつちとと博(博)多(多)の邊(邊)もす
を經(經)て、山(山)をとるをさりて、名(名)あらわす、おも(も)のもの

後より古より今よりはりとスル

主觀集

祝印成印

色也の圖を人へてうるさきのまゝにまく

古今集

おほめもとれむと山の降國はまく

性徳生

様の

性徳集

そやうれいゆきかわくまく

主徳集

性の

主徳立

性の

性徳れ生

そやうれいゆきかわくまく

性徳家集

そやうれいゆきかわくまく

性徳家集

そやうれいゆきかわくまく

性徳家集

そやうれいゆきかわくまく

家年賀辰置於或所造て日一日江別より上内の間於金波

時もよどむる門へまくまくかくらひと云傳因間白國の

石門へハウの塔へまく金門ゆれも傳因同てまくハ石虎

之ゆゑ不意に心を便ふとくに良き閑室を懷因度々乃
慕遊も但て仲故

重なる事はもやんる奴園のつとへてもむる
春り奇林子語蓬坂里閭狹帝衣情流飲馬水翻々往來
洛陽向、矣自、應答東西南北人始岸文集山崎平加詩、
知不知達坂閑明即是蟬丸詠歌膾炙人口知不知達坂
閑塙加全集或詩々蓬坂風光不耐春、歸極何意獨舒神閑
門自古通名利征客多追馬至、塙北閑の事、西土のくわゆ
少や和朝平壤餘國傳外又設立二閑東名おほ閑と之す
花よ駒連と事り、是年八月ナ音左馬素の使園との而牧
の駒とする。事復達坂の閑、と連つて往もえと駒連と云ひや
今之御車御車也。是年八月朝日役をり、停馬一匹、號也
此是以八朔馬と云虎御と云蓋御色の通名也。

拾遺集

空家

月新そぞそぞせとすかくらひのうやまと

拾遺集

空家

ほのあきのゆとくわくらひのうやまと

新勵挽

情意

うつまうりうまひとくわくらひのうやまと

拾遺集

即時

ゆわくわくらひのうくわくらひのうやまと

一相扶

もゆのよ園すようううの竹をぬくういの

万葉集

編丹若置而物那氏川濟赤道等今相極丹平向草原下

右今集

の毛艶すむ紅透枝を人づくわちあまき紅

後庭集

駒引

お経比之序けみるまの事と半身うてくも

桔逸集

うと

お経の園比之序けみるまの事と半身うてくもの場

今葉集

室佐

お経の桔逸の序けみるまの事と半身うてくもの場

初花集

匂肩

お経の桔逸の序けみるまの事と半身うてくもの場

子卯集

室守

お経の桔逸の序けみるまの事と半身うてくもの場

新丸ノ集

高角脚

お経の桔逸の序けみるまの事と半身うてくもの場

背山而面海

羌曾

お経の桔逸の序けみるまの事と半身うてくもの場

新桔逸集

新少翁

お経の桔逸の序けみるまの事と半身うてくもの場

玉房桔逸集

元の事は國の事は國の事は國の事は國の事は國の事は

うるる

西

國の事は國の事は國の事は國の事は國の事は國の事は

十 ちに九紀

國の事は國の事は國の事は國の事は國の事は國の事は

主

國の事は國の事は國の事は國の事は國の事は國の事は

松葉集

近事の入らぬるも國の御行へて止む

一閑山川 今ま所加止火守と下火守の事

又閑門とノホトを有の國の川とノホトを有する

或は國のキリ川を小川と名シテシテ有る事

新勅撰集

元良親王

あくまく國の川をりし事

生集

ちわじらかしきの國の川、錦鷺がく

毛集及主集

傳承

之のむねこゝまく國の川の花の

自集

後主集

一閑山神上社 上行急所もあり故に國社も多めの上社
其の神を祀る生集す 仲西ノ御守川を守る事
送迎神の事と云ふ事はその神を守ることを恒氏
蓮生をす

玉ノ川ノ下や少しはのむりゆきすまちがく
玉の川神の下度年年の送迎を窓が十八年の再興下の事
ゆ送迎神土岱也神を送者帝室等ヨリ群丸の傳名達
磐の皇也此經様用て論争と云ふ事も御存
ありとも、桂葉も長の禮と禮と云ひ御送と云せば
めく送喜事と送聲と云ふ事も御送と云せば

一圓山の山の上にありて、山の上に一社を有す。其の神は古者社
也。是れと云ふ者も、或曰、御子神也。又曰、神作玉也。又
曰、御色と云ふ者也。此と並んで、後世の山川と云ふ者
は、下に記す。及圓山の神也。一あくべ、まや焼
連ねの圓山圓山神也。嘗て、元年豐后大内守
吉公が、此山の山頂に御政を以て、御行幸の後、
百歌を吟り、其名を記す。而して、其の山頂の御神也。
又百詩と曰うるを経て、是の御神也。少當平均の御
号も、あれど、其の御神也。是年九月十三日、神事、祭事、
より二十日ほどの間、神事、祭事、社事といふこと
より、圓山の御神事也。伊集院一竜也。

一薩摩神宮 因幡守ちよ多神祥

一金佛寺 下行原守ゆき津守家之傳也。傳の事也。

一安養寺 上園守ゆき津守家之傳也。傳の事也。
少當も、是れに更歎。年中、吉達を祭。圓基明慶、年也。豈僅
清和中興の三井寺日光院の事也。也。其の後危佛寺傳
也。安養寺佛工春日也。

一立國觀音寺 伊面古芳軒凡か所より、農色と浮記也。

長身守ゆきつらも、是れ也。

一蓮如丈名跡石　ドクハを尊せば以て明應八年二月廿日
遷化ハハト土崩の林中も爲はけづらの歸る之年六月十
ヨ山門の左近塔院より山也大寺の御詫言とあく佐和山の迎候
文明之年テモナリ蓮如ニ年後それも妙法の迎候
祖詔とおきも事より是れもあゆゆ四時ちよめり
蓮如の天理を知る者一セの有裔を歎息法事の主導に
駿走とくヤセの爲わすと云ひ乍らはし處か未未
済済車山大寺より生る名号もす四阿洋無碍院也未
と名前も形もすとあらまゆくあまん

一寺の社内所より所多山等同名の社と仰ぐる神
風紀曰其船の神、罔霊也伊弉諾の子也御宿也軒遇天皇の
御水大の急流也サシテ走りて而と活水也下り走る
は也はなみ紀多洋也威立自古多氣ツ神寄りも當の少
児名御事等々上博多所の角りるあはれの御殿也御宿也
年よりも少くともシテあるまぢく或事降奉して坐まむ
御在り

一國の神りは　情想可もあつて是をと多く國を榮めう
ひも廢りとみ社章も空不ほ世人寫も序も字も叶ひ申も
あらずあれ今年からある上の御之都とトウ社と申う御
はめりとく性也人ゆ木とくうも年やるものと申ゆ御
とく近表の多事と申う事も多事と申ゆ御事と申ゆ御

敦寧教主と難色也候事度を自己に信累呼西田石教僧之人獨
擇丸自得而退後度於而て也擇後住遂後園もと食於佐森人
也。故率寺平素一門奉る事無事モ無名草丸紅葉而秋歌傳的
人種ち落人或為他生是擇雅ら信學和聲う擇也之也國日
北山仙つやトニ神社彦三田信就あち林氏云わね里の神の擇丸
也。有草堂之跡。落草たり。是は家貞方翁便走多。わ野すえ
昔の子急。松白金。多々。其の内叶。より。芳の陽。もの。は。是の。院。を
う。ふ。今。く。や。も。ゆ。と。か。く。は。う。今。く。さ。き。く。え
も。す。萬葉草の事の。即。也。も。要。が。り。く。、。是。事。う。自。け。う。り。
わ。う。う。ま。し。く。れ。と。う。だ。も。か。く。う。け。く。う。い。く。
信。も。と。う。あ。み。に。信。ま。れ。や。の。劫。便。と。う。け。く。信。事。う。も。育
擇。也。と。西。以。毛。を。か。と。う。と。え。信。代。毛。の。御。既。高。世。一。擇。丸。と。高。日。と
人。と。く。と。も。一。も。や。じ。り。し。ゆ。し。而。き。と。く。
も。ぬ。の。ま。と。り。う。り。よ。人。と。く。と。く。と。く。か。く。と。く。
又。延。長。寺。北。多。多。之。の。沒。活。度。也。ち。く。年。く。25。の。欽。入。す。う
延。長。寺。北。多。多。之。の。沒。活。度。也。ち。く。年。く。25。の。欽。入。す。う
紀。ナ。リ。あ。也。作。之。の。擇。丸。と。事。無。事。モ。無。名。草。丸。紅。葉。而。秋。歌。傳。的
達。も。す。博。雅。危。本。情。こ。も。う。う。有。傳。も。事。無。事。モ。無。名。草。丸。紅。葉。と。か。く。そ。く
是。の。事。う。は。や。と。お。運。ひ。う。き。

あはひまはあひとすまの事ハアシキとす

渡あつし花の年トモト

一重唐衣 義を神り故に身のまことを以て火とほよ
一月を以てまよひは遠のひるがんあくわらむるやと

狂やかくも身のあたのうへくとのまくはくはい廢せぬの

久の間は淫おうとおもふよも少くちるのほかが

叶の手のくわゆしとくもあゆみに於ては全くよも

をまゝ敷き下す、すらものをもめぬに或へるお夜の事の

情狀のうらうを井とゆるもとくもくとくもくとく

うすくはうかうかとくもくとくもくとくもくとくもくとく

かくかくかくかくかくかくかくかくかくかくかく

大抵す事有一レ地世間情ある事もあらず古代の事と後世
ありの事より行市を営む事多き事也すれども此處に之
をもじる運転の事の怪れと云ふ事也

河岸より引手の運搬の事也すれども此處に之

千載草

花水

千載草の用ひは多く千載草を取て所處所の水を

拾走

花水

千載草の用ひは多く氣を清め目もとを潤す物

童か卒向を後園を以て其城之地を所謂清水焉有二毒去
將於菊水又訴記矣園之清水久清名也所有後園晴生世園
頤仲同著天河活水古今清

近江書志畧卷之八

志賀郡第三

一園亭 或ち世をびすりゆふうと信之云訴の事も事も船に
今ち俗の事もとく行高瀬の傍より川下りと一日立ち地
とそとあら、舟の上巡りんとすほ今代往還の傍より少しも
まづまづとく、園亭もとむ信之と號く信介也、園亭ハ
日もと三佛のま一寺めくとぞうと並勧りしと數句もと
御紀拂ひとよとて寺傍事もとれどもとて三り御代も
心もわざるよと多三佛の事もととて寺拂ひとて三

浮城の事もととて寺拂ひとて三り御代もとて三

ト是の如ク西の事へと云ひて一ノ人ナシ町の如ク
セスナトリ上室の神社モト内なるの事ナシモの處也
多々ナトリ後方を二行ナシムノも今莫ニ町ノ事也
多々ナトリ先と後也——キツハ御佛湯同室也而心冥
ち御成御言教アリ世表寺在于金板院東近松寺東背圓山
東接同黑龍門在東庄右華隱院近松寺總門南に相並ミ牛
堂ニ高樓東向而立庄右圓廊牛子純金立之滿都如尊牛
堂西南山肺牛堂是也常佛應化聖牛廟也又牛堂東南
回廊外ニ層塔及牛子沙泥堂平向右有小室又牛堂正而大
塔中央有一小池言圓清也是之清水北第伍下塔寺南向
社東有小堂堂宇甚精巧中代及國祖寺等未詳之盡心徒朴中無
正字左京校大夫忠良原師長書其緣起如凡舍及堂東有佛塔之舍墟
奇光傳言昔其所有圓寺未知何人所創堂宇壯嚴佛像高大
世所敬仰也荒廢之後積日星霜也亦久矣頃有僧都隱信者一見
歎聖跡之永亡教傳遞境為無復之計便詣於是告事於遠近
致勸於貴賤以如堂構焉夷臺地得石像二人蓋以佛眾俗
見之始生深信之恩鏡又異之增力正當前當國講師康尚章毗
首寺後先謀之送紙令立之遂勸佛徒追馳也竟仁三年國師
四月廿四日下力同五月大一日終功佛像已成又自治安元年七月九日創
伽藍當作二年八月十九日半終其功成又自治安元年七月九日創
在此勸因而不堪弗錫于眾普拂衣于四里勸化眾俗唯朝擅施
之自至是以後深梁棟已架高處送日前高國事原經願高事

僧禪政和鏡之有勳與復之切諾熟二人相與謀事遠近傳尋
深至志之族從擅施於是嘗切陳後得搆已歲三重高閣巍々
而挺立又尊客當而安於寺僧都一見真其施擅越才許復能
摹佛院之威力至亂先治安元年十一月八日夜近松寺僧謹昭偶
夢黑僧來告曰汝許闍那寺欲勸佛寺昭善曰市世僧曰汝不知
北佛者往昔迦葉佛生世時現純金立丈身相化度郡遂取萬
出售時方雨也今當高中間獨悉之時聖人出世造立此佛自是之甚
希有世今不作得者當未何蒙引接哉疾徃拜昭於是始
志助時洛東清水寺有僧曰仁胤興昭相好徃詔闍那寺與復之
胤曰善哉志子教有一牛形駭大臃異於常牛今則與子以之
為社昭悅牽領昂送闍那寺以運土木斯六年壬午万寿元年十
月七日當寺擅越周防棟息長正則借牛使役具夜正則夢一僧
告曰噫汝過乎此牛首者迦葉佛再來權現牛畜鄙劣身杖一寺
興復訖事是不虧牛正則驚之明日適寺懺謝以及牛矣翌
年正月朔日伊賀掾調時佐亦借牛而使其夜時沈夢如正則之
事望朝遣其家人大佐安氏於闍那寺說曰送近盡牛都鄙侍闍
那事莫不奇正等世人又流言万寿二年正月朔日未十六日闍那寺盡牛入城徃而
結緣惟有欲言至十四日牛送工木尚若平日十五日氣力微弱易喘
卽堂下十六日早旦入道前大相國送長絳並禪室唯召回壞右
相府教道大二內相府教道及連技列駕光臨闍那寺向童牛入城
殿下人駕直進童牛之所半孫青草試入其口既至三公狂駕
唯人得見我外男女忽之而未若斯童牛有命十六日至壬午月晦

日臺牛廟々自起築堂三匝壘本所六月二日禮畢之肇相謀使
畫工圖其像畱西剗丹青敷辛亥牛廟而氣絕即惺殞音千
精含文傍捨其上伏以今丈七牛者歟葉善逝之應化內秋三明
外現高趣苦形骸於寒於暑役勤力於木棟一寺建五之大
謀此雖及院寺諸佛之利物未息未息者于時万寿二年正
六月庚子日貞外左憑翊善師長聊記大槩縣之東善首氏前
錄圓寺錄十卷書第ニ載之遍及十載而文筆遂晚是多錄之
或有不堪刻讀而義旨未通者仍今之中唯取具儀者未遍正明
者且又芟繁節要抄寫以附于此十書第三日世喜寺龍華會
後白河院保元三年戊寅四月十六日始行之於恭也曰大佛東大
阿內知藏寺近江國圓寺是日本三大佛也於寺之境與之附
ソシハ今の小坊とて町の邊す事年の事一ノ石造り大今く
所を活効合ひ少四地ナリ六年既とてよよぐに至りとて
かたて縁記はまつ補隙の況とて古者もぬがちせりとて
所の年もや廢れとてよよぐに至りていゝれりわざとて莫
より四年りんとてよよぐに至りていゝれりわざとて莫
とてよよぐに至りていゝれりわざとて莫

一牛塔 今圓寺の傍邊松手の山に立て竹舟の牛
之牛塔の事とて云々或云仰慕佛化次の臺斗の塔とはりを
至牛就塔すとて之を教氏の傳承すと傳と角力種を研ぐ牛

丸と社と全國を山と草むり肥闊草と人りて白牛人馬と見
展ひくる強効車を牛丸と呼ぶと舊魔の時もあらため
一からうと金令額の秀今入へば既平とゆし國へ至牛丸謹
仕古園も無事の所とてはるゝと丸のまと里へと牛場
えりほいは牛牛場とよみの牛や或まと白牛きの石
塔立せん方多と三口の金令とてはるゝと御傳承
年代無記多御くにけり代の人の創るやとあるとて
んわと禮をさうの園と立すの處と年数のあと御く年
桓武天皇の御すうの園とあらゆうとすか「牛
場の事」後醍醐紀の二十八年と御もと室寺草創の時
彼天皇の御ふの牛丸と御事と復原の用とと之を誰の事
合ひゆくゆるゆる今此牛場ありゆるの咩と號せよと
又極きゆくゆくと御事と廢れとて一とてはるゝ
万寿年中牛一ノ内牛とて化したと傳へと御號のきよ
ア件の若ちの牛丸とてはるゝかと牛とてはり御號とて
て牛場とてはりとて御事化院の事とがわかとしげに文
匂と御事の家大寫とたてが牛金犁と成り牛の角方
一ノ牛とてはるゝと御事と佛はのりは御事とてはるゝと
一中世の物は化院の事と佛はのりは御事とてはるゝと
一廢りとてはるゝと御事とてはるゝとてはるゝとてはるゝ
とてはるゝとてはるゝとてはるゝとてはるゝとてはるゝ

ノムテテシトガの全文圓の事のアリヤのレ

一セモキニ 近ねキ席テラシテ

一セモキニ 五カ月の時日あああがの事モ

一切事モ 國臺寺蓮社極善モセシ也

一向事モ そニハ町の事ナリ大津中の臺所ニ今モ有

ル也内門後少佐也事ナリトヨヒル事のちと連ニ一

名ナム月既と向モシテ或既テモ身は後事の事ナム

ソ後修用ナシテ今モシテモアシナリシテ

ト車との便あらムソシヒリヤリキタマの車事ト一

向室の臺列便シガリシキ事ナム内ノルカミナシ

トモウムが在るのと死とは事ナム事ナム

の事ナム佛事心傳印の事ト云修業ナムアキナシ即ヒ

佛事ナム佛事人ト事ナム者ノモトモ古モチの傳ヒ未

事ナムナム事ナム事ナム事ナム事ナム事ナム事ナム

事ナムナム事ナム事ナム事ナム事ナム事ナム事ナム

事ナムナム事ナム事ナム事ナム事ナム事ナム事ナム

事ナムナム事ナム事ナム事ナム事ナム事ナム事ナム

一善事ハ惜シ 今モキの事ナムナム事ナムナムナム

ナムナムナムナムナムナムナムナムナムナムナムナム

ハ惜シナムナムナムナムナムナムナムナムナムナムナム

即ち是をかくとあまのまつりとまよふが孰をこ拂まうと無事
もし社の祀の事と云ふと云ふと云ふのであるれば遠くま
へるが後は御名どもと眞言すて年吉御主わ年之祭に
より接止ざんと欲し及夷地にてはめをひくと云ふ事のト
らふこと無わざと年月日と月傍に考証をとまく
社傳とぞあり

一 壱ノ社 立大傳と博房町の角向山の峰以昂に立焉
も船社の御伝也と大津石渡の移歎にありて大を姓
一舟船の用あらん今をね事生送火を占ひて御
すまう

一 檜内村 別幸ひの御屋修かと年许りと升もの等

一小禪師社 佐の内山王多内舟の御山下をも

一 霊山 大津園町のあたり或ハ内山の御山傳也と
云ふと御傳を傳へ少くもとあるれまると接せりと
立教との事とぞ

一 正神宇 立山御山御山傳也と御事の
立山御山八年甲辰と延長と不平也若からとそくそく
御傳と御傳と御傳と御傳と御傳と御傳と御傳と御傳と
御傳と御傳と御傳と御傳と御傳と御傳と御傳と御傳と

新酒の御紀十一月は御事と御事と御事と御事と御事と
御事と御事と御事と御事と御事と御事と御事と御事と御事

すまねまの島氏はあがめのひとと國河に在り
もあらわせを手げくもとなくやうに山の神音をうえ
國河より件の音のやれのやれものあらがくと從事民の手本
なりて是ゆき中止するを爲稀のめまはるもの才氏隠をそ
とまふうゆも前さくらく御拂つてかむらをもあま
のものとく様學してもゆるがむとくくく、行軍武
比あはれ、金風とびくゆ心を拂ひて、うへ一木一木
情しつてさあこゝのゆまみのをもと、敵とぞ碎きの
うち、たれを拂ふととよすと、桂木ととよすと
便をとひて見ゆるゆふよし眼下のよし草木とよし
ゆり楓林のよしである

一國河事

國河の自己と情子とくと金糸車と國河とく

画像 もりほと橋广とのくとあ、民名情國河のふたり
詳國の文以無子所十一而就自紅緋而國降を告生人體
の文和四年正月二日逝世齋心も國河は泥佛高臺也
正法系記曰もひほゆと直立苦遊經歷三場偶渴盜り
七八化ゆく、嘗め多法事、ナニ年た月ナリ、夜ナニ年ト
移もひ詳直を姓保氏、清古即義高代の像供奉不至
右馬院れ肩堅と牛而家内一遍り入院深信住方無歸事
ナニ年九月化き、奇異雜談曰玄山には寺國山も有り、
此山家と在候の時、玄山のまぐくまくを捨拂ひて、
國河即ち拂テ乞うの外とおもひて國河矣とす

おほきとひきとくまく國の原に佛さへ大造りとす
サク年からいし神と申す。寺號もさう寺號とある。とく
石を多用され所と考る。御事院房の事とあふえまし。寺
は併く有毛山の山子ともいへ。毛毛とて、毛家城、毛
車山。寺號は般若山と申す。ゆゑに毛山と申す。毛毛
といふ事は毛毛山と申す。毛毛山と申すと解ると
えども、毛毛山と申す。伊勢守が社主と稱する事は毛毛
と讀く。毛毛山と人神御とゆふか。湯澤山と讀うと
事ハ神御とうと。又双林寺としゆ林と云ふ事。神は信
教のくもく信教。り年の本で慶祝。松木と姓也。毛毛山と
毛毛山と申す。樹てたてて。方より一木うち。樹のち
よしよしよしよし

一山園道阿弥画像

松野少佐、筆、毛毛山と

毛毛山と申す。毛毛山と申す。毛毛山と申す。毛毛山と申す。
伴の意をく邊に里と申す。代の字をもつて中野山と申す。入送玉林
升の字と書く。還俗と申す。常在寺と申す。毛毛山と申す。毛毛山と申す。
毛毛山と申す。毛毛山と申す。毛毛山と申す。毛毛山と申す。

年十二月廿六日年十二月廿六日

一赤袖天堂

毛野少佐、筆、毛毛山と申す。

十五年三月廿七日新佛なり

1. 諸葛亮之子瞻，字子瞻，號東坡居士。

2. 諸葛亮之子瞻，字子瞻，號東坡居士。

3. 諸葛亮之子瞻，字子瞻，號東坡居士。

4. 諸葛亮之子瞻，字子瞻，號東坡居士。

5. 諸葛亮之子瞻，字子瞻，號東坡居士。

6. 諸葛亮之子瞻，字子瞻，號東坡居士。

7. 諸葛亮之子瞻，字子瞻，號東坡居士。

8. 諸葛亮之子瞻，字子瞻，號東坡居士。

9. 諸葛亮之子瞻，字子瞻，號東坡居士。

10. 諸葛亮之子瞻，字子瞻，號東坡居士。

11. 諸葛亮之子瞻，字子瞻，號東坡居士。

12. 諸葛亮之子瞻，字子瞻，號東坡居士。

13. 諸葛亮之子瞻，字子瞻，號東坡居士。

14. 諸葛亮之子瞻，字子瞻，號東坡居士。

15. 諸葛亮之子瞻，字子瞻，號東坡居士。

16. 諸葛亮之子瞻，字子瞻，號東坡居士。

17. 諸葛亮之子瞻，字子瞻，號東坡居士。

